

史書・古墳遺構から葬送儀礼の有り様を想像する

メモ)鉄本 2022.10.07

古墳時代の首長が亡くなった時、葬儀儀式の場所はどこで、どんな服装で、どのように古墳に登ったのか、儀礼の様態を復元することは難しい。しかし史書や遺構から葬送儀礼の有り様の一端を窺うことは出来ないかと思い、その手掛りを探してみる。

1. 古代中国の歴史書にみえる倭国の葬送儀礼

(1)「魏志倭人伝」の原文・読み下し・用語解説

(原文)其死有棺無槨 封土作冢 始死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣 他人就歌舞飲酒
已葬 挙家詣水中澡浴 以如練沐

(読み下し)その死には棺はあるも槨はなく、土で封じて冢を作る。始め死して停喪(ていそう)すること十余日、時に当たりて肉を食わず、喪主は哭泣し、他人は歌舞飲酒に就く。已(すで)に葬れば、家を挙げて水中に詣(いた)り、澡浴(そうよく)すること、以って、練沐(れんもく)の如し。

(用語解説)

* 停喪:「喪にとどまる」の意味。本葬まで貴人の遺体を棺に納め仮安置すること

* 練沐:1周忌の喪服である練り絹(精練した絹織物)を着て水に浴すること

(2)「隋書倭国伝」の原文・読み下し・用語解説

(原文)死者斂以棺槨親賓就屍歌舞妻子兄弟以白布製服
貴人三年殯於外庶人卜日而瘞及葬置屍船上陸地牽之或以小輿

(読み下し)死者は斂(おさ)むるに棺、槨を以ってし、親賓は屍に就いて歌舞す。妻子兄弟は白布を以って服を製す。貴人は三年、外に殯(もがり)し、庶人は日を卜して瘞(うず)む。葬に及べば、屍を船上に置き、陸地でこれを牽く。あるいは小輿(しょうよ)を以てす。

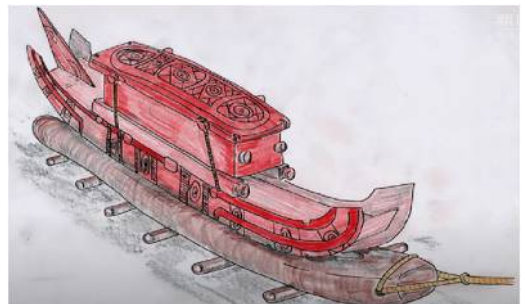
(用語解説)

* 小輿:小輿(しょうよ)のこと。棺をのせて担ぐ具

(3)葬送風景

白い喪服で喪の期間を過ごし、殯の後、屍を船に乗せて埋葬地まで牽いていく。

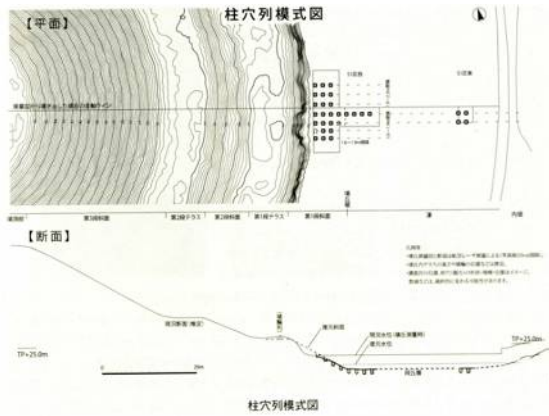
*「喪船」という言葉は、「古事記 仲哀記」にも出現している。
2006年に巢山古墳から出土した喪船は全長8mに、「木棺」は長さ約4mに復元できる。右図の喪船の想像図は、「2006年2月23日の朝日新聞記事の挿絵」(河上邦彦教授案に基づく)
(注)立命館大学名誉教授和田晴吾氏は遺体そのものを運んだと考えており、棺は墓壙内にあるものとする。



2. ニサンザイ古墳(5世紀後半) ～葬送用木橋～

木橋の構築については、滞水による墳丘の崩落に起因する粘土層と泥炭層の観察から古墳築造の最終段階と考えられる。架橋の時期は、築造直後、又は、完成後暫くの間経過後が推定され、架橋の時は濠に水がなかったと推測される。木橋は極めて短期間に撤去されており、このことから木橋は棺を搬入する行為を含めた葬送儀礼用と考えられる。初葬か追葬であったかを詰めることは難しい。(「ニサンザイ古墳発掘調査報告書」の説明文を要約)

木橋は、幅12m、長さ55mの大きさと、後円部の内堤から古墳の中心線に沿って架橋されていた。



上の写真: 「ニサンザイ古墳発掘調査報告書 2018」 堺市教育委員会 より抜粋

3. ナガレ山古墳(5世紀初頭) ～墳頂への通路～

墳丘内通路: 墳丘裾の埴輪列に直行する2列の埴輪列を確認。この2列の埴輪列部分は周囲より少し高くなっている。2段目埴輪列もこの遺構の延長部分で途切れており、墳頂部でも埴輪列は確認できなかった。このことから、この2列の埴輪列で区画された遺構は、葬送の時に墳丘を登る通路と考えられる。(現地説明板)



←埴輪列と墓石(東側くひれ部)

出典: 「ナガレ山古墳」パンフレット 河合町教育委員会

4. 応神天皇陵古墳(5世紀初頭) ～絵図に描かれた応神天皇陵の後円部と「渡御」の神事～



【「渡御(とぎょ)」の神事】

応神天皇陵古墳の後円部には、誉田八幡宮が置かれ、毎年9月には神輿が後円部頂上にある御堂までお渡りする祭礼が行われる。

* 誉田八幡宮は、559年に欽明天皇よって創建されたと言われている。(誉田八幡宮ホームページより)

出典：河内名所図会第3巻

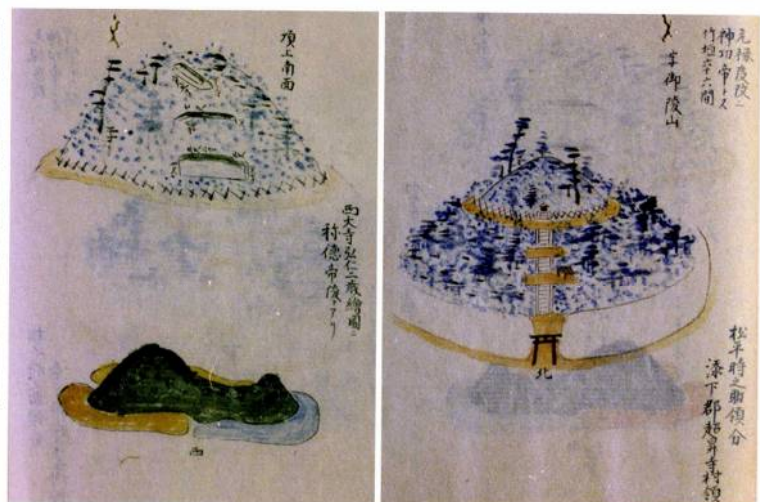
5. 佐紀御陵山古墳(4世紀末)

～後円部の石燈籠～

佐紀御陵山古墳は、1875年まで神功皇后陵とされていた古墳。現在は日葉酢媛陵とされている。右図は浅野(長祚)梅堂(1816～80)幕末の書画家によるもの。「大和国帝陵図」後円部の渡土堤から墳頂までの道が描かれている。出典：国立国会図書館デジタルコレクション



上の写真は、佐紀御陵山古墳から五社神古墳群に移された石燈籠の列。



「大和国帝陵図」にみる佐紀御陵山古墳
後円部北側周濠の渡土堤から墳丘に付けられた石段を描く。後円部最上段根には、竹垣がめぐる(右)。頂上部の奥には、「屋根形石」を描く(左)。

右の写真には、後円部墳頂までの石段、頂上部の「屋根形石」が描かれている。(「大和国帝陵図」)

出典：「シリーズ遺跡を学ぶ ヤマト政権の一大勢力・佐紀古墳群」今尾文昭 新泉社 2014

6. 巢山古墳(4世紀後半) ～「喪船」による船葬～

立命館大学名誉教授和田晴吾氏によると、船葬には、①観念としての船(=死者の魂を乗せて他界へと運ぶ船)と、②実際の船を棺として使用(=千葉県大寺山洞穴、静岡県若王寺古墳群の例)がある。

巢山古墳の喪船は前者の例である。

出土の木製品;

① 豎板(クスノキ)

約2.1m×78cm

厚さ約25cm。

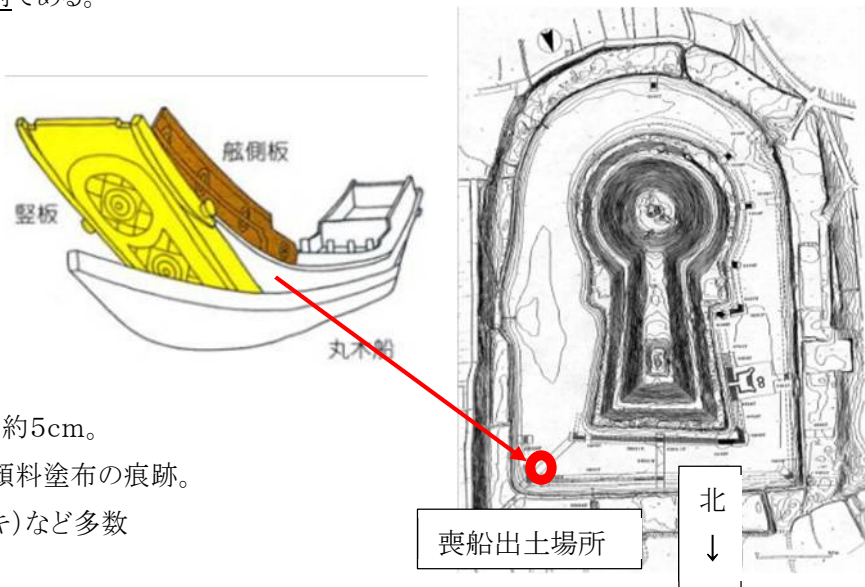
表面に円文様、
直弧文。

② 舷側板(スギ)

約3.7m×45cm、厚さ約5cm。

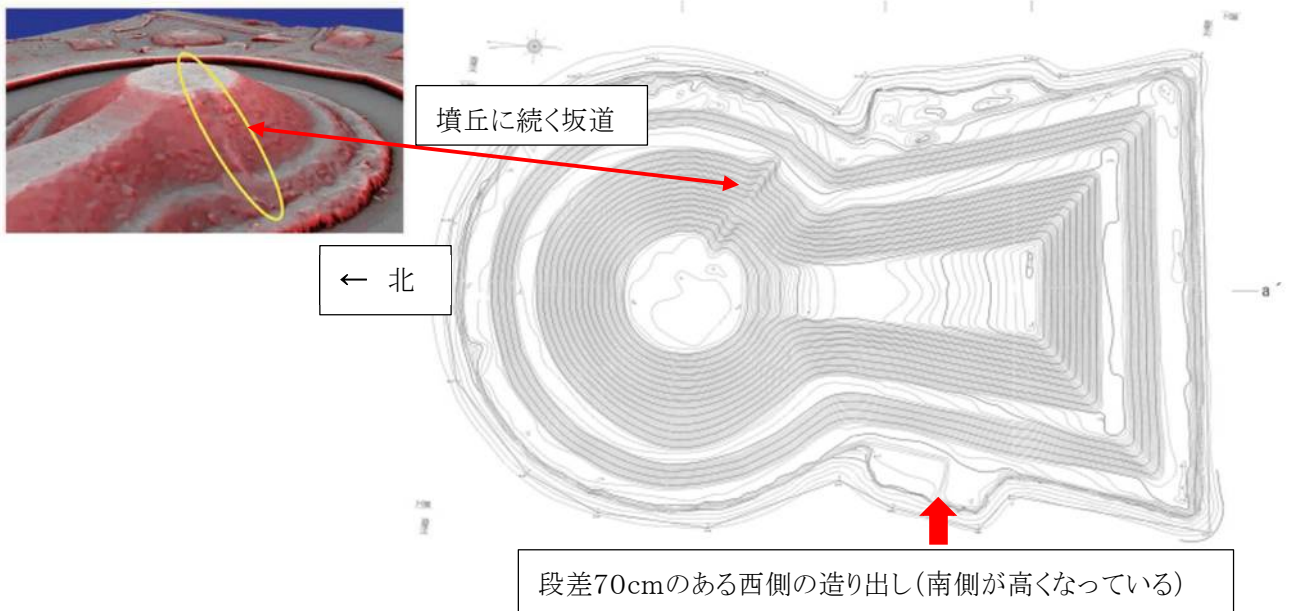
円文様、帯文様。赤色顔料塗布の痕跡。

③ その他三角形材(クスノキ)など多数



死者の魂を運ぶ船を表す船形埴輪は40基余りの古墳から出土しており、前方後円墳や造り出し付円墳の造り出し部分に置かれている。(但し、九州の場合は墳頂に置かれている。)古代人にとって、濠によって隔たれた墳丘は他界であり、造り出しに置かれている船は死者の魂が他界に到着したことを示す。

7. コナベ古墳(5世紀初頭) ～西側造り出し円筒埴輪の「ぐいち」配置と段差～



出典: ・赤色立体図は

「ヘリ搭載航空レーザー計測データによる大型古墳の微地形表現」

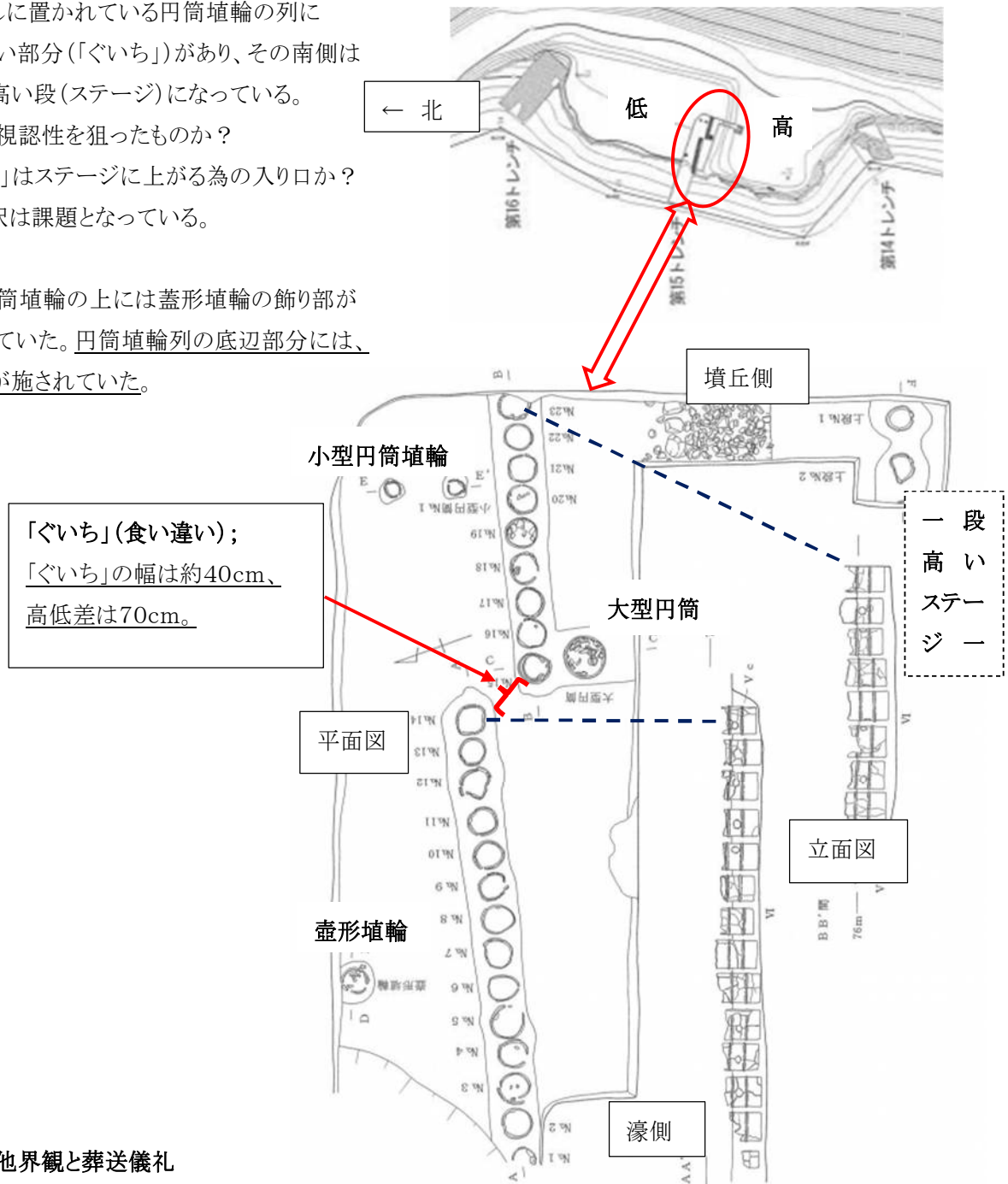
アジア航測株式会社)藤井紀綱/吉永 剛/佐田一徹 檀原考古学研究所)西藤清秀

・等高線図は、宮内庁書陵部紀要第62号 2011 より抜粋

【前頁の赤い矢印の部分図】

造り出しに置かれている円筒埴輪の列に
食い違い部分(「ぐいち」)があり、その南側は
70cm高い段(ステージ)になっている。
儀式の視認性を狙ったものか？
「ぐいち」はステージに上がる為の入り口か？
その解釈は課題となっている。

大型円筒埴輪の上には蓋形埴輪の飾り部が
置かれていた。円筒埴輪列の底辺部分には、
化粧土が施されていた。



8. 倭人の他界観と葬送儀礼

(1) 日本の古代人(倭人)の他界観

他界観には、①山上他界観:死者の霊は山岳部に棲むという考えと、②地下他界観:生前の富を地下に再現させる大掛かりな施設(墓)を設けるという考えがある。後者の典型は秦始皇帝陵・兵馬俑坑である。倭人にとっては、火山が祖山であり、火山(阿蘇山、富士山など)を頂点とし、各地では擬火山としての「神奈備山(カムナビヤマ)」を信仰の対象としてきた。有名な神奈備山には三輪山(桜井市)があり、地方では岩木山(青森)、金北山(佐渡)、立山(富山)、大峰山(奈良)、白山(石川)、石鎚山(愛媛)などが靈魂の棲む地として信仰の対象となった。古代の日本では死者の霊が浄化されて神になり、その靈魂は最終的に山の頂にとどまるとされてきた。

古墳は、地上に擬制された「山」であり、王の靈魂は他界への入り口である造り出しを通り、「山の頂」である墳頂に「神」としてとどまる。つまり、神の棲む山(古墳)は山陵であり天皇陵である。古墳時代の葬送儀礼は、このような他界観を背景に儀式化された。王の靈魂は喪船に乗って造り出しに到着し、そこで船を降り(船形埴輪が象徴)、禊ぎにより魂を浄化させ(導水施設のある囲形・家形埴輪が象徴)、墳頂に続く道を登り、頂上の居館(家形埴輪に加え、食物や器財を模した土製品なども置かれる)に棲む。

(2) 葬送儀礼の手順

① 殯(もがり)儀礼: 遺体を喪屋に仮安置し、死者の最終的な「死」を確認。

天皇の場合は仮安置の場所として殯宮(ひんきゅう)を設ける。

② 遺体の運搬: 野辺送り 素服、白い布の服装で喪船又は小輿による運搬

喪服が黒になったのは養老喪葬令(718年)「服錫紵条」で薄墨色の麻細布の着用を定めてから。

律令の編纂者が中国皇帝の喪服「錫衰(しゃくさい)」を金属の錫(=黒)と解釈ミスした為。

中国の「錫」は灰汁処理した白い麻布。(服飾史学者増田美子氏)

③ 墳丘への登坂: 周濠を持たない古墳(例: ナガレ山古墳) = 登り口はくびれ部付近から登坂

周濠がある古墳(例: ニサンザイ古墳) = くびれ付近に設けられた陸橋を渡り登坂

④ 墳丘上の儀式: 納棺儀礼(装身具、威信材) → 埋納儀礼(水銀朱塗布、石材で封鎖、粘土で密封)

⑤ 墓上儀礼: 墓壙上に石積み、埴輪の配置、祭祀用土器の配置、食物供献の儀式

【天武天皇の喪葬儀礼 ～日本書紀～】 686年9月9日天武天皇崩御—9月24日儀礼開始・殯宮に安置—諸侯・僧尼の供物や弔辞—688年11月11日大内陵に埋葬 約2年2ヶ月の期間

【参考文献】

- ・「百舌鳥最後の大王墓をさぐる —ここまでわかるニサンザイ古墳—」
第八回百舌鳥古墳群講演会記録集 堺市文化観光局文化部文化財課 2019
- ・「ニサンザイ古墳発掘調査報告書」 堺市教育委員会 2018
- ・「ナガレ山古墳」パンフレット 河合町教育委員会
- ・「天皇陵古墳を歩く」 今尾文昭 朝日新聞出版 2018
- ・河内名所図会第3巻 「宮内庁書陵部紀要第62号」 2011
- ・「シリーズ遺跡を学ぶ ヤマト政権の一大勢力・佐紀古墳群」 今尾文昭 新泉社 2014
- ・「大和国帝陵図」 国立国会図書館デジタルコレクション
- ・「ヘリ搭載航空レーザー計測データによる大型古墳の微地形表現」
アジア航測株式会社 藤井紀綱/吉永 剛/佐田一徹 榎原考古学研究所 西藤清秀
- ・「古墳の他界観」 和田晴吾 国立歴史民俗博物館研究報告 第152集 2009
- ・「新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝」 石原道博 岩波文庫 1951
- ・「古墳の方位と太陽」 北條芳隆 同成社 2017
- ・「神と死者の考古学」 笹生 衛 吉川弘文社 2016
- ・「埴輪群像の考古学」 小浜 成 青木書店(近つ飛鳥博物館) 2008
- ・「死の機能 前方後円墳とは何か」 小路田泰直編 岩田書店 2009
- ・「縄文の思想」 瀬川拓郎 講談社現代新書 2017